

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十九年七月八日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (金沢大学人間社会研究域教授 杉山 欣也)

狂言 因幡堂(いなばどう)

怠け者で大酒飲みの妻が里帰りし、これ幸いに離縁状を送りつけた夫は、新たな妻を得ようと、因幡堂に籠もって薬師如来に申し妻をします。夢のお告げのとおり西門の一の階に衣をかざいた女がいたので、うれしくなって手を引いて家に伴います。旧妻の悪口を言い、初々しい新妻を相手に酒を酌み交わしますが、この女もなかなかの大酒飲みです。腹を立てた夫が衣を引き剥がすと、何と旧妻が夫の企みを知って、懲らしめに来たのでした。切って帰ります。そうなるのは三人も承知で、いつもの失態を繰り返すと思われまふ。

能 敦盛(あつもり)

出家して今は蓮生を名乗る熊谷次郎直実(ワキ)は、かつて手に掛けた平敦盛の菩提を弔うため都を出て一ノ谷の古戦場に向かいます。須磨の山手に笛の音が聞こえ、憂き世をかこつ草刈り男たちに出会います。なかに風雅を解する若者(前シテ)が交じり、その青葉の笛の持ち主は一人居残って十念を授かることを願ひ、蓮生の日ごろの供養に感謝して消え失せます(中入)。その夜法事を営む蓮生の前に敦盛(後シテ)が現れ、法の友を相手に懺悔の物語りをします。驕れる平家はひと昔の夢、寿永の秋には西海に流離し須磨人となり果てた一門にあって、思い返せば如月六日、父経盛の陣での歌舞の遊びよと舞いなぞるうち、翌日の最期が記憶に蘇って敦盛は思わず太刀を手に蓮生に迫りますが、やがて我に返り同じ蓮の成仏を願って合掌します。世阿弥はこの音楽好きの美少年に平家の罪を一身に背負う潔癖な感受性とそれゆえか友情から疎外された孤独な魂を与えました。(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附 前シテ(草刈男)

後シテ(平敦盛)

段熨斗目を着附に着、白大口をはき、上に水衣を着て、腰帯をしめる。黒垂れをつけ、梨子打烏帽子をいただき、十六の面をかかけ、白鉢巻をしめる。

終了予定 午後八時二十分頃